

オンライン相談を始めました!

総合診療部、こころの診療部では、コロナ禍で来院が困難な方や、遠方の方向けにオンラインによる相談を受け付けております。

総合診療部では、「子育て支援相談」として未熟児出生の方を対象に、発育のこと、発達のこと、食事のことなど、日常生活に関連した内容についてご相談いただけます。

- 対象:未熟児出生で6歳以下の方
- 相談時間:20分(継続した相談は行いません)
- 予約可能日時:毎月第3木曜日11:00~20分間の相談
- 料金:5,500円(税込)

こころの診療部では、「オンライン発達相談」として発達の遅れ、言葉の遅れ、運動の遅れ、落ち着きがないなどの行動上の問題、集団行動が苦手などの社会性の問題、文字の読み書きの問題、計算が苦手などの問題などのご相談を受け付けております。

- 対象年齢:乳児から15歳までの方
- 相談時間:30分(継続した相談は行いません)
- 予約可能日時:毎週水曜日9:00~30分間の相談
- 料金:11,000円(税込)

詳細は右記HPよりご確認ください、ネットにてご予約ください。



子どもたちの命を守るための医療機器の整備や、療育環境の改善のためにご寄付をいただけるとありがたく存じます。当センターへの寄付は税制上の優遇措置(寄付金控除)を受けることができます。詳細はHPをご覧ください。
<https://www.ncchd.go.jp/donation/application.html>

各所連絡先

患者ご家族からのご予約	予約センター	〈直通〉03-5494-7300(月~金 9:00~17:00)
医療機関の先生からのご予約・お問い合わせ		
救急の場合	救急センター	〈代表〉03-3416-0181(24時間受付)
小児集中治療室(PICU)への転送・搬送	03-5494-7073	小児救急搬送チームにつながります
新生児集中治療室(NICU)への転送・搬送	03-3416-0181	NICUにつなぐように伝えてください
母体搬送	03-3416-0181	母体搬送担当の医師につなぐように伝えてください
早期に診療が必要な場合 セカンドオピニオン外来 医療機器の共同利用(放射診断部)	医療連携室	〈直通〉03-5494-5486(月~金 8:30~16:30)

国立成育医療研究センター 広報 SNS National Center for Child Health and Development

国立成育医療研究センターや、成育医療に関する様々な情報を投稿しています。ぜひ、フォローしてくださいね。

Facebook: @ncchd <https://www.facebook.com/ncchd/>

Twitter: @ncchd_pr https://twitter.com/ncchd_pr



発行: 国立成育医療研究センター 理事長 五十嵐 隆
 編集: 企画戦略局広報企画室 村上 幸司 近藤 留衣 田地 美香
 〒157-8535 東京都世田谷区大蔵 2-10-1 電話: 03-3416-0181 FAX: 03-3416-2222

成育だより

Contents

- NEWS/セミナー・シンポジウムのご案内
- センターの取り組み/診療科のご案内
- 新任挨拶/専門職(ひと)シリーズ
- 研究開発のトピックス/レジデントの紹介
- 医療連携・患者支援センターより/Information



国立成育医療研究センター

小児がんセンター・血液腫瘍科診療部長
富澤 大輔医師
日本小児科学会学術研究賞受賞



本賞は、小児医学・医療の分野において優れた研究業績があり、今後の発展が期待される会員に対して、日本小児科学会が毎年表彰しています。2021年度は、当センターの富澤 大輔医師が「乳児期発症急性リンパ性白血病に対する標準治療確立のための研究」で受賞しました。小児の急性

リンパ性白血病（ALL）は、現在では患者さんの90%が治る時代になりました。しかし、生後1歳未満の乳児では、未だ半数以下の患者さんしか助かりません。富澤医師は、これまで乳児ALLの臨床研究で多数の業績をあげてきましたが、中でもJPLSG-MLL-10臨床試験では主任研究者を務め、乳児ALLに対する効果的な化学療法を導入すると同時に、晩期合併症の要因となる造血幹細胞移植を再発リスクの高い患者に限定して良好な治療成績を達成し、その成果を血液学の最高峰の雑誌であるBloodに昨年報告しました。これからも、難治性白血病で苦しむ子どもたちのために、貢献してくれると期待しています。

産科病棟に自動運転システム搭載
電動車椅子を導入しました！

周産期・母性診療センター長
左合 治彦

当センターのAIホスピタル事業の一つとして、産科病棟に自動運転システム搭載電動車椅子を導入し、出産後の患者さんの病室までの移動のお手伝いをする自動運転モビリティサービスの実証実験を開始しました。同サービスはこれまで、空港や病院外来などでの活用事例はありましたが、病棟内での導入は国内初となります。

出産直後の患者さんは、身体の痛みなどのため車いすでLDR（陣痛・分娩・回復室）から病室に戻ることが多く、医療スタッフが車いすを押して移動していました。その際、医療スタッフは新生児を乗せたカートや患者さんの荷物などを運ぶ作業もあり、大きな業務負荷がかかっていました。本実証実験では、「WHILL自動運転システム」※1を産科病棟に導入し、当センターの倫理審査委員会の審査・承認を受けた臨床研究として医療スタッフの業務効率化や患者さんの移動における安全性・利便性などを検証し、医療の現場におけるサービスの向上を図っていきます（研究担当者：赤石 理奈医師、岡部 伶香助産師、西 桜助産師）。

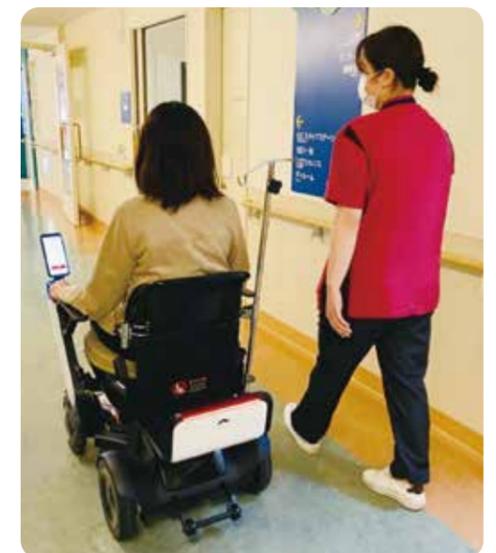
導入が決まった時点では、医療スタッフからは「今までの車椅子の方が慣れていて使いやすいのでは?」、「使い方が難しそう」など戸惑いの声がありましたが、導入直後から「出産後の患者さんの傷に響かないように円座クッションを常備してほしい」、「点滴棒を両サイドどちらにも設置できるようにしてほしい」などの現場からの積極的な意見によって、病棟での活用に適した改良がおこなわれています。また、試乗した患者さんからは「従来の車椅子より振動が少なく乗り心地が良かった」、「振動が少ないので傷(会陰切開)に響かなくて良かった」などの感想をいただいています。

今後は、現在の病室前までの移動サービスから利用範囲を拡張する計画を進め、患者さんのベッドへの移動がより楽になるよう各病室内まで自動運転で入っていくシステムを構築することを検討していきます。



※1:WHILL自動運転システム

WHILL社が開発する、自動運転・衝突回避機能などを搭載したパーソナルモビリティと、複数の機体を管理・運用するシステムで構成された、歩道・室内で活用する自動運転システムです。あらかじめ病棟内の地図情報を作製・記憶させることで、パーソナルモビリティがセンサーで探知した周囲の状況を解析しながら時速3km（分速50m）で自動運行します。搭乗者の操作は必要なく、出発時に設定した目的地へ乗っているだけで移動できます。



セミナー・
シンポジウムのご案内

子どもの心のケア

- 開催日時** 2021年9月10日(金) 9:50~16:00
- 開催方法** Webセミナー(Cisco Webex)
- 対象** 子どもの心の診療に関わる医師、メディカルスタッフ、福祉関係者、教育関係者、行政担当者など
- 内容** 成育医療等の提供に関する施策の概要から有事の子どものメンタルヘルスケア、COVID-19禍における様々な子ども達の状況について
- 参加料** 無料 **定員** 170名
- 申込み方法** Web申込受付のみ、要事前申込、先着順受付
- 申込み方法** 2021年7月26日(月)9:00~8月27日(金)
※定員になり次第締め切らせていただきます。
募集状況はホームページをご確認ください。

申込先URL <https://forms.office.com/r/MBbdw2H2bi>

申込先QRコード



問い合わせ先 子どもの心の診療ネットワーク事業 中央拠点病院
国立成育医療研究センターこころの診療部
e-mail: kokoro-pj@ncchd.go.jp
HP: <http://www.ncchd.go.jp/kokoro/>

第4回小児リンパ管疾患シンポジウム

- 主催** 小児リンパ管疾患研究班
- 開催日時** 2021年10月17日(日)14:00~16:00
- 開催方法** Zoom ウェビナー (Web 開催)
- 対象** 患者さん・ご家族
(どなたでもご参加いただけます)
- テーマ** 「皆さんとつくる リンパ管疾患のこれから」
- 内容** 小児リンパ管疾患に関する最新の研究状況、シロリムス、HP上での新しい取り組み等について情報共有し、疾患克服に向けて、患者さん・ご家族、医療従事者、研究者による更なる連携の強化を目指します。
- 参加料** 無料
- 申込み方法** 参加希望の旨を2021plds@gmail.com (小児リンパ管疾患シンポジウム事務局)へメールでお知らせください。後日、接続方法をご案内いたします。
- 詳細** プログラムなどの詳細については、決定次第、リンパ管疾患情報ステーションにてご案内いたします。



問い合わせ先 小児リンパ管疾患シンポジウム事務局
2021plds@gmail.com

コロナ×こどもアンケートで見えてきたこと

社会医学研究部 森崎 菜穂
半谷 まゆみ

コロナ×こども本部では、2020年度の1年間で、5回のオンライン調査「コロナ×こどもアンケート」を実施し、のべ3万人以上の方々にご協力いただきました。コロナ禍におけるこどもたちへの影響について、調査で分かってきたことの一部をご紹介します。

1.生活習慣の乱れが遷延

2020年4～5月の臨時休校中、多くのこどもたちに生活リズムの乱れが見られていました(第1回調査)。第3回調査(2020年9～10月)・第4回調査(2020年11～12月)では、学校が再開されてもなお、コロナ流行以前と比べて就寝時刻の遅れ、スクリーンタイムの増加、間食の増加がみられることが分かりました。

2.15～30%のこどもに中等度以上のうつ症状

第4回調査では、回答してくれた小学高学年の15%、中学生の24%、高校生の30%に、中等度以上のうつ症状が示唆されました。第5回調査(2021年2～3月)で、「自分のからだを傷つけることがある」と回答したのは小学生で10%以上、高校生では30%近くにのぼりました。この数値は以前のコロナ×こどもアンケートの結果と比較しても高くなっており、強いストレスの遷延がうかがわれます。

3.「コロナの影響で先生や大人へ話しかけづらくなった」半数超

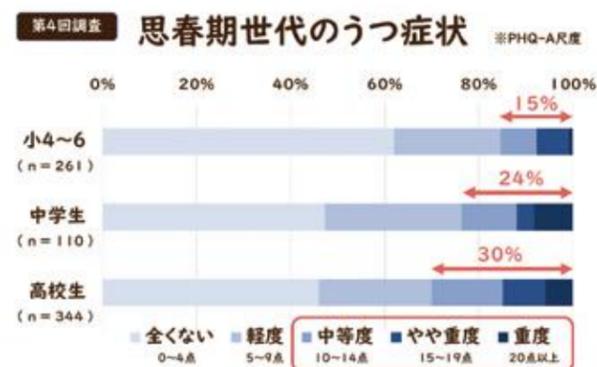
第5回調査では、1年間をふり返って、コロナによって生じた変化について尋ねました。こどもたちの約半数が、コロナのせいで友だちと話す時間が「減った」と回答しました。また、コロナのせいで先生

や大人への話しかけやすさが「減った」と回答したこどもは半数以上いました。コロナのせいで学校に行きたい気持ちが「減った」こどもは40%でした。

4.子育て資源にも深刻な影響

第5回調査では、様々な子育て資源がコロナ禍でどのような影響を受けているかを保護者に尋ねました。こどもが自由に遊べる場や機会、こどもが同世代と遊べる場や機会がコロナのせいで「減った」と回答した保護者は、いずれも8割以上でした。また、子育てについて相談できる公的な場や機会(子育て広場・健診・保護者会など)、私的な場や機会(祖父母・ママ友など)がコロナのせいで「とても減った」と回答した保護者が半数程度にのぼりました。保護者のストレスも気になります。

コロナ禍のこどもたちへの影響がまだ続きそうです。小児科医には、こどもたちや時には保護者のSOSのサインを見逃さないことが、平時以上に求められているでしょう。



コロナ×こども本部 公式ホームページ

現在実施中のアンケートやこれまでの結果をご覧いただけます

コロナ×こども本部 LINE公式アカウント

または @codomo で検索

7月1日より ファシリテイドッグを導入いたしました

ファシリテイドッグとは、病院で活動するために専門的に育成された犬のことです。ハンドラー(医療従事者であり、犬をコントロールする人)とペアで活動し、手術室・検査・治療への付き添い、歩行訓練や作業療法といったリハビリへの参加など、入院患者さんの治療や療養生活に関わります。大きな特徴は、導入する病院の専属となり、それぞれの病院のニーズに合わせた活動を行えることや、患者さんが同じ犬と長期にわたって触れ合えることです。ファシリテイドッグは、皆さんからの寄付で成り立っています。引き続き、当センターへのご支援をお願いいたします。

<ハンドラー挨拶>

権守礼美(ごんのかみ あやみ)です。この度、ファシリテイドッグのマサのハンドラーとして、皆様と一緒に、療養中の子どもたちとご家族をサポートさせていただくこととなりました。

私は学生の頃より、小児看護に携わりたいと思い、他県小児専門病院に就職いたしました。その臨床経験20年以上の中では、先天性心疾患を中心に、病棟・ICU・手術室・外来看護を経験しています。2012年には、小児看護専門看護師の資格も取得し、胎児期から成人期を見据えた看護を提供するため、数年成人病院での経験も積み重ね、この度ハンドラーとしての道を歩む選択をいたしました。

幼少期から犬を飼い、生活の中に必ず犬がいて、その生活は、楽しく癒されるものでした。病気に向き合い、闘う子どもたちとご家族に、そのような時間を提供しながら、とっても賢いマサとともにチームの一員として、子どもたちやご家族の力を引き出し、サポートしていきたいと思っています。

<ファシリテイドッグ紹介>



マサは、ラブラドル・レトリバーの2才の男の子です。2019年2月23日に、オーストラリアで生まれました。お母さん犬とお父さん犬はどちらも優秀で、介助犬や盲導犬を世界中に輩出する家系です。その中で、ブリーダーさんが「この子はとてもどっしりしていて、ファシリテイドッグに向いていますよ!」と太鼓判を押してくださったのがマサでした。

同級生のタイと一緒に、ドッグトレーナーと沢山のパピーシッターさんたちに囲まれて育ちました。約2年の専門的なトレーニング過程をこなし、国際基準の適性試験を経て修了しました。落ち着きがあり、学びの吸収力がとても高いことが強みです。日本有数の大きなこども病院の一つ、成育医療研究センターで、存分に活躍できる力を持っています。



麻酔科・疼痛管理科・成人麻酔科

統括部長 鈴木 康之

世界トップレベル水準の産科麻酔施設認定 Center of Excellence を取得しました!

Recognizing the 2020 Designees



麻酔科・疼痛管理科・成人麻酔科では年間5000件を超える周術期麻酔管理をおこなっています。胎児から新生児、小児、思春期、成人期の患者まで幅広い年齢層に対応しています。小児の心疾患、脳神経外科疾患、小児外科疾患、肝臓・腎臓移植、耳鼻科、眼科、整形外科、形成外科、皮膚科、歯科、カテーテル検査治療、MRI検査、放射線治療、呼吸器・消化器内視鏡検査などすべての周術期麻酔管理に麻酔科医がチームで携わります。また、2020年の新型コロナウイルス感染流行のため、4月～6月は手術制限を行っておりましたが、7月以降はほぼ例年通りの件数に回復し、外来や手術室では、感染被ばくに気をつけながら日々診療をしています。

小児麻酔では手術室や麻酔科外来でのAI技術の実用化の研究をしています。ヒトとコミュニケーションできる日立製作所のロボットEMIEWが麻酔を受ける子どもの手術室案内を手伝い、術前外来で麻酔説明を補助するなど、AIの麻酔領域における有用性を検討しています。EMIEWロボットは患者や家族の不安軽減や癒し効果のみではなく、感染対策にも役立ちます。

周産期麻酔チームは専任スタッフ5名、麻酔科フェロー・レジデント2～3名、産科部門からのフェロー1名の8～9名体制で、産科医、助産師、看護師等と密に連携をとりながら診療しております。分娩件数は、高次周産期施設として緊急母体搬送も含め概ね年間約2100件以上におよび、代表的な帝王切開(約700件/年)、硬膜外無痛分娩(約900件/年)胎児治療の麻酔(約50件/年)などを365日

24時間体制で管理しています。周産期麻酔外来では、術前妊婦や無痛分娩を希望する妊婦に加えて、ハイリスク妊娠の分娩前の対面診察を行っていましたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のためオンライン診療を併用することになり、現場では産婦さんの不安がないように一層の配慮を心がけています。

2020年に産科麻酔部門は米国産科麻酔学・周産期学会(SOAP)の厳しい基準をクリアし、卓越したレベルの産科麻酔を提供する施設としてCOE(Center of Excellence for Anesthesia Care of Obstetric patients)に認定されました。

今後も安全性と満足度の高い医療を提供すると同時に、当科で研修を希望する麻酔科医育成の最適な場となるようチームで研鑽していきます。



AIホスピタル：EMIEW君と手術室へ



麻酔科チーム2020年3月撮影

臓器移植センター

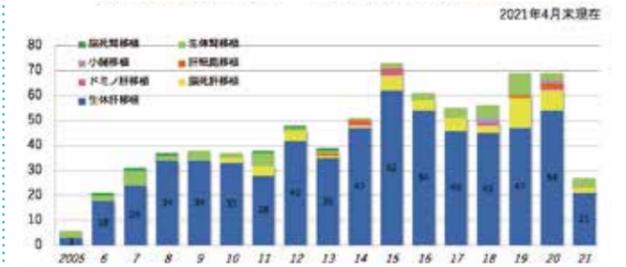
センター長・副院長 笠原 群生

当センターでは2005年に肝移植プロジェクトを開始しました。その後2011年5月に臓器移植センターが発足し、肝移植・腎移植・小腸移植・心臓移植(2020年度より)などの固形臓器移植と、研究所と協力してES細胞から作成した肝細胞移植など多臓器の移植医療を積極的に展開しています。移植医療は外科医だけで実施できるものではなく、周術期管理・免疫抑制剤管理・内分泌代謝管理・感染症管理・腎機能管理・成長発達など長期的な小児患者さん特有の管理が必要です。当センターでは該当する各専門診療科・小児がんセンター・救急部・手術集中治療部・放射線診断部・病理診断部・看護部・事務部門などが積極的に移植医療に関わることで、小児移植患者さんの良好な移植成績を支えています。



当センターでは2020年4月末まで746例(肝移植676例、腎移植62例、小腸移植3例、肝細胞移植5例)の臓器移植を末期臓器不全の子どもたちに提供してきました(図)。全国の小児科の先生・基幹病院・小児医療施設・大学病院等から患者さんの紹介をいただいています。肝移植症例が最も多く、年間の小児肝移植症例数は60～70例と国内で最多の実施数です。これは、日本の小児肝移植の約60～70%を占めています。当センターは小児臓器移植基幹病院のため、生直後に発症する重症の代謝性肝疾患が20%、緊急移植を要する劇症肝炎が

成育医療研究センターの年次別小児臓器移植数



20%と、移植前後の管理が大変難しい症例が多いのが特徴です。他施設よりも重篤な患者さんが多いのですが、移植後10年生存率は93%と高い生存率を維持しております。また生体ドナーさんには重篤な合併症を認めていません。臓器移植が必要な小児患者さんご家族の多くは、最後の砦として当センターを受診されます。患者さんご家族の期待に120%添えるよう、日々重症患者さんの診療に真摯に向き合い、個々の患者さん・ご家族に対して最善の医療を提供することを繰り返すことで、当センターの良好な移植成績が成り立っていると自負しています。当センターの成績は全国の10年平均生存率85.2%より8%ほど良好ですが、個々の患者さんにとっては‘ゼロか100’でしかないことを決して忘れずに、さらなる成績向上・移植医療の質の向上のために、職員一同で精進して参ります。臓器不全でお困りの患者さん・ご家族がいらっしゃいましたら、当センターに是非ご相談いただければ幸いに存じます。



臓器移植チーム
医師、移植コーディネーター、医師事務補助員

看護部長挨拶

嶋田 せつ子



4月1日付で看護部長を拝命いたしました嶋田 せつ子と申します。平成25年4月から平成31年3月まで6年間、副看護部長として当院に勤務、その後2年間は独立行政法人国立病院機構 東長野病院で看護部長として勤務いたしました。

看護部は4月に新しく129名の新人看護師・助産師を迎えました。新人看護師教育は、オリエンテーションから分散型とし、半日はe-learningに切り替えました。新型コロナウイルス感染症の蔓延防止のため実習経験が少ないことを補うために「看護倫理」「コミュニケーション」「フィジカルアセスメント」「多重課題」等の講座を新規開設し、オンデマンドで繰り返し学習できる環境を作りました。コロナ禍という学生時代から困難な環境を経験し、志高く入職した新人看護師達の斬新な発想を引き出し、大切に育てていきたいと考えております。

令和3年4月から看護師・助産師のユニホームがスクラブデザインの2色制(ピンクとブルー)に変わりました。ピンクは日勤用・ブルーは夜勤用へと色を変えます。この2色制の取り組みは、2019年看護業務の効率化先進事例アワード2019最優秀賞を受賞した熊本市医師会熊本地域医療センター「ユニホーム2色制」と「ポリバレンタース育成」による持続可能な残業削減への取り組み」で有名となりました。そこで、当院でも2色制を導入し、以前のピンクの白衣が着たい」という職員の声も尊重し、日勤の際は白衣も選択できるようにしました。看護サービスの品質の測定(看護サービスの質管理)の物的要素に「従業員のユニホーム」と記されています。ユニホームは、看護管理の象徴であり、勤務者自身が快く、機能性も高く、外部からは清潔感があることが、看護部のイメージアップ

や良い組織風土に繋がると考えております。

私は、看護部長として次の4つの運営方針を考えています。

1. チームワークがよい看護部を作る。まずは「チーム看護部長室」から
2. 看護管理者は「看護サービスの質を保証すること」だと思っています。看護師長・副看護師長とともに「看護の質の向上」に努めます。
3. 看護職員個々のキャリアアップが組織全体の成長につながるよう支援していきます。
4. これまでやりたいと思っていたこと、よきことを実現するためにチャレンジします。

微力ではありますが、国立成育医療研究センターの一員として精進していきます。

今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。



副看護部長3名と
左から 鈴木 美和 嶋田 せつ子 萬 弘子 滝本 悦子

災害対策部

部長 楠 孝司



平成7年に起きた阪神淡路大震災の経験から日本の災害医療体制は、災害拠点病院の設置、広域災害救急医療情報システム(EMIS)の構築、平成17年には、発災直後からの医療チームの派遣を可能とするDMATが創設され、大きな変化を遂げてきました。

私が「災害医療」に関わりを持つこととなったのは、災害医療センターに異動になったのが始まりです。そこで、当時の病院長の以前からの構想であった日本DMATが発足し、私は研修事務局を担当する事になりました。隊員養成研修開始にあたり、DMATには医師、看護師の他にロジスティクスを担当する業務調整員を配置しました。被災地における医療ニーズに対し適切な情報を元に、医師、看護師、物資等の医療資源を適切な時と場所に送り込み活動するための環境を支援することを役割とします。

業務調整員の研修プログラム作成にあたってはJICA国際緊急援助隊事務局と協力し、日本赤十字社救護班などのノウハウを参考にしました。

日本の「災害医療」教育の多くは、英国の災害教育プログラムであるMIMMSによるCSCATTTを基本としています(図1)。もとは、事故や災害の発生現場での対応のために考えられたものですが、地震等の甚大な災害発生に伴う病院での対応にも当てはまります。

最初のC(指揮と連携)では、災害対策本部の立ち上げによる指揮命令系統、役割、連携体制を構築し、S(安全)では安全管理として3つのS(Self自分自身の安全、Scene安全な環境、Survivor患者・被災者等の安全)の確保、次のC(情報伝達)では、院内外との連絡手段の確立や災害時通信機器の整備、EMISの活用などにより情報伝達体制を構築します。そしてA(評価)では、各部門からの被害状況報告を集約し、医療の継続の判断や、来院する被災傷病者への対応へと反映させていきます。これらCSCAの体制を整えた後にTTTの実施となります。これは図1の通りです。

災害時にはこのCSCATTTを常に意識することにより円滑な活動が行われます。

日本は災害列島であり、いつ、どこで大きな地震が発生してもおかしくはありません。首都直下型地震はM7

クラスが30年以内に70%の確率で起こると言われています。

当センターでは多くの小児・周産期の入院患者さん他、1日1000名もの外来患者さんへの診療が行われています。患者さんと職員の生命を守り、機能が低下する中で入院患者さんへの診療を継続しつつ、さらに被災傷病者へ対応するために病院に求められる対応力は図2に示すとおりです。そのため、BCP事業継続計画では、優先させるべき業務は何か、平時より備えるべきものは何かを計画し災害時に備えています。

災害対策部では、BCP及び災害対応マニュアルを随時改訂し、安全と被災への対応、診療の継続につなげる対策を行って参ります。

大規模事故・災害への体系的な対応に必要な項目 CSCATTT



日本DMAT研修コース (英国MIMMS Major Incident Medical Management and Supportより引用)

図1



図2

【経歴】

昭和56年 国立がんセンターに入職
平成15年 災害医療センター課長補佐 教育研修室長
平成21年より国立病院機構施設への異動により課長職、事務部長職
令和元年 当センターもみじの家事務長
令和2年 災害対策部長兼任
日本災害医学会評議員、厚生労働省医政局日本DMAT検討委員会委員、日本DMATインストラクター
主な災害派遣等
阪神淡路大震災、新潟中越地震、新潟中越沖地震、能登半島地震、熊本地震など。
DMAT事務局支援活動 東日本大震災、熊本地震など。

研究所

小児血液・腫瘍研究部

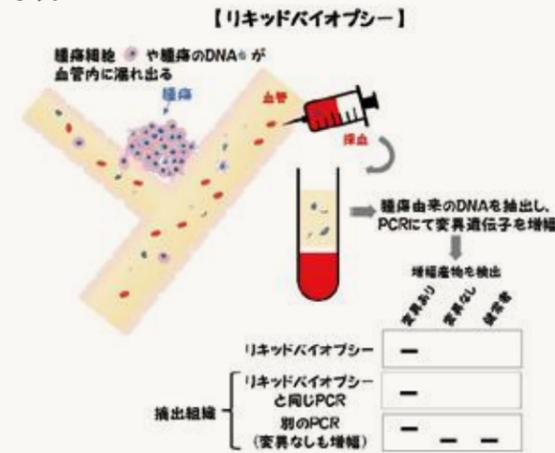
上級研究員 上野 瞳

子どものがんの多くは遺伝子の異常(突然変異)に由来すると考えられていますが、未だその異常が分かっているものがたくさんあり、診断や治療薬の選択が難しい場合があります。そこで私は、小児固形がんの新たな遺伝子異常を見つけて、遺伝子診断方法の確立やがんの発症のメカニズム解明、新薬開発を目指す研究を行っています。

最近、こどもに多いタイプの腎腫瘍の中の1つである腎明細胞肉腫にBCOR遺伝子変異(BCOR-ITD)を世界で初めて発見し、これまで診断が難しかったこの腫瘍の遺伝子検査による診断を可能にしました。さらに、これを最近注目されている「リキッドバイオプシー」という検査方法に応用することを目指しています。リキッドバイオプシーは、腫瘍細胞由来成分が血液などの体液にごくわずかに漏れ出ることを利用して、これを検出することで腫瘍の存在を知ることができます。腫瘍を直接取らずとも、通常の採血などで診断ができますので、患者さんの身体的な負担が軽く、繰り返し、検体採取が可能になるという利点があります。手術を行う前に診断できれば、先にがんの種類に合わせた適切な治療薬を使ってがんを小さくして、手術をしやすくすることができるので、小児がん医療への導入が期待されています。実際に、BCOR-ITD変異のあ

る腎腫瘍の患者さんの血液でこの変異の検出を行ってみたいところ、がんがまだ小さい患者さんの血液でも診断が可能であることを確認し、小児がんにおけるリキッドバイオプシー検査の可能性を見い出しました。

今後も引き続き正確で感度が高い検査の確立を目指し、少しでも患者さんの役に立てるように研究を行っていきたくと考えています。



臨床研究センター

生物統計ハンズオンWebinar、文献検索Webinar開催のお知らせ

臨床研究センターでは、令和3年8月～10月に「EZRを使ってみよう:生物統計ハンズオンWebinar初級」、「文献検索のコツ:用途に応じた文献検索とその方法」を開催いたします。これから臨床研究を始めようとする医療従事者を対象に、基礎からわかりやすく解説いたします。

本WebinarはMicrosoft Teamsを利用したオンラインでの開催です。ご自宅やご所属機関からの受講となりますことをご了承ください。開催日時や申し込み方法につきましては、以下QRコードをご参照ください。

なお、「文献検索のコツ:用途に応じた文献検索とその方法」の詳細につきましては、決まり次第ホームページにてお知らせいたします。

「EZRを使ってみよう:生物統計ハンズオンWebinar初級」

担当部署: 病院 臨床研究センター データサイエンス部門 生物統計ユニット

【詳細はこちら↓】



【参加申込フォームはこちら】
申込締切:令和3年8月17日(火)→



回数	テーマ	日程	担当者
第1回	図表の作成・要約統計量	8月19日(木) 17:30-19:00	三上 剛史 朴 慶純 岩元 晋太郎
第2回	カテゴリカルデータの検定	8月26日(木) 17:30-19:00	
第3回	連続データの検定	9月 2日(木) 17:30-19:00	
第4回	多群の検定	9月 9日(木) 17:30-19:00	
第5回	多変量解析入門:回帰分析	9月16日(木) 17:30-19:00	

「文献検索のコツ:用途に応じた文献検索とその方法」

担当部署: 研究所 政策科学研究部

回数	テーマ	日程	担当者
第1回	用途に応じた文献検索①: 特定の文献を見つける	9月30日(木) 17:00-18:00	山崎 むつみ 政策科学研究部共同研究員
第2回	用途に応じた文献検索②: 研究計画時の先行研究の整理	10月7日(木) 17:00-18:00	小河 邦雄 政策科学研究部共同研究員
第3回	検索テクニック: 用途に応じた文献検索①②でカバーできていないこと	10月14日(木) 17:00-18:00	片岡 智恵美、芹澤 優子 政策科学研究部共同研究員

※申込方法等の詳細は決まり次第ホームページにてお知らせいたします。

後期研修医(専攻医・レジデント)紹介

長元 幸太郎 (ながもと こうたろう)

出身は火の国、熊本県の天草という海が綺麗でお魚が美味しい島で、熊本大学を卒業しました。趣味はソフトテニスです。一生懸命粘り強く頑張りたいと思います。よろしくお願ひ申し上げます。



矢賀 勇志 (やが たけし)

出身大学:信州大学。至らない点も多々あるかと思いますが、お子さんと一緒に小児科医として日々成長していければと思います。また、浅学非才の身ではありますが、小児医療の発展に僅かでも貢献出来るような活動を行っていきたくと考えております。どうぞ宜しくお願い申し上げます。趣味は、読書、サイクリング、登山です。



中村 紗佑里 (なかむら さゆり)

埼玉県出身で昭和大を卒業後、西埼玉中央病院で初期臨床研修を修了しました。将来は小児内分泌を勉強していきたいです。4歳児の子育て中で、親として学ぶことも多くあります。趣味は映画を観ることです。子どもたちを守るだけでなく、保護者にも寄り添うことのできる小児科医を目指しています。よろしくお願ひします。



山野 詩央 (やまの しお)

東京都出身、筑波大学卒業。小児医療に真摯に向き合い、母児ともに信頼いただけるよう頑張りたいと思います。御指導の程、よろしくお願ひいたします。趣味は旅行、写真、テニスです。病院の近くにも多くのテニスコートがあるので、落ち着いたらやってみたくです。



名越 倫太郎 (なごし りんたろう)

鹿児島県出身、鹿児島大学卒業後、虎の門病院で初期研修をしました。趣味はフットサル、お酒、ファッション、カラオケ、漫画です。子どもと遊ぶのが大好きで、在学中に保育士資格をとりました。子どもたちと楽しく過ごせたらと思います。よろしくお願ひします!



近藤 遼太 (こんどう りょうた)

出身地は名古屋で順天堂大学を卒業しました。ここ成育で知識を身につけ、患者さんに慕っていただけるような小児科医を目指したいと思います。趣味はクラリネットやジャンルを問わず聞いたり演奏したり、テーブルゲームを大人数でやるのが好きです。よろしくお願ひします。



金 喜栄 (きむ ひよん)

名古屋出身で徳島大学を卒業し、東京都板橋区で初期研修を終えました。大学生の頃の夏と言えば部活や阿波踊りで賑やかでしたが、引き続き感染対策が問われる今年の夏は本を読むこと、気になっていた美術館に行くこと、おうちカフェの腕前を上げることを楽しみたいと思います。



島岡 佑典 (しまおか ゆうすけ)

岩手県盛岡市で育ち、東北大学、仙台市立病院を経て成育にきました。エネルギー溢れる環境に日々刺激を受けながら研修させていただいています。趣味はピアノ、テニス、ボードゲームなどです。甘いものやコーヒーも好きです!小児科の勉強は勿論ですが、先生方やメディカルの皆様との繋がりが大切にしたいと思っています。3年間よろしくお願ひいたします!



祖父江 瑠子 (そぶえ ようこ)

出身大学:横浜市立大学。初期研修を横浜労災病院で行った後、小児について幅広く学ぶため、1歳からずっと過ごしてきた横浜を出て成育で研修する道を選びました。中学生の頃から合唱を続けてきましたが、コロナのためお休み中です。1人でも多くの子ども達、ご家族を笑顔にできるよう頑張ります。よろしくお願ひいたします。



山井 卓磨 (やまい たくま)

千葉県出身、東京慈恵会医科大学卒業し、附属の葛飾医療センターで初期研修を行いました。趣味は読書、映画・バスケット鑑賞です。成育には優秀な先輩・同輩ばかりおられ、日々勉強の毎日です。目まぐるしく過ぎていく毎日ですが、一人一人に誠実に接していくことを心がけてまいります。



水野 皓介 (みずの こうすけ)

千葉県で中高と育ち、昭和大を卒業し医師としてのスタートを切りました。沖縄で2年間初期研修を行い、小児科専攻医として4月から当院でお世話になります。趣味は美味しいご飯を食べる事、早くコロナの時代が終わり、みんなでご飯を食べられる日を切望しています。野球をやっていたので、スポーツ観戦も好きです。今後ともよろしくお願ひします。



医療連携・患者支援センターより

昨年7月よりセカンドオピニオン外来のオンライン対応を行っています。開始当初は限られた診療科のみで行っていましたが、現在は一部を除きほとんどの診療科で対応しており、月に数件の予約があります。県をまたいでの移動を避けられる、他者との接触なく診療が受けられる、遠方の方でも利用しやすいなどオンラインならではの利点は様々です。もちろん、対面でのセカンドオピニオンもこれまで通り

行っており、患者さんやご家族それぞれの状況やご意向に合わせて受診方法を選択いただけます。コロナ禍においても受けられる医療に制限が生じたり、選択肢が狭まったりする事がないよう取り組んでまいります。何かご質問などありましたら医療連携室までご連絡ください。

